

イザヤ書 59 : 21

ルカによる福音書 12 : 8~12

「言い表すこと」

<創立記念礼拝>

本日は、宮崎中部教会の創立96周年を覚える記念礼拝です。今日この時、この礼拝堂で、神さまの御前に兄弟姉妹が共に集い、礼拝をささげることが出来る恵みを、心から主に感謝いたします。

96年という年月は、この教会がそれだけ多くの荒波を経験してきたことを意味します。この宮崎の地に集められた神の民は、あの、大きな戦争の時代も通り抜けてきましたし、勢いの良い時期もあれば、悩み多き時期もあったでしょうし、また今はこの「コロナ禍」と言われる歴史的、世界的困難の只中にいます。

しかし、この教会は、「イエスさまは主である。」「イエスさまは救い主である。」「父、子、聖霊なる三位一体の神さまを信じる。」この言葉を、告白し続けてきました。この信仰に、生かされ続けてきました。

96年前にこの群れに属していた人々と、今ここにいるわたしたちは、まったく違う顔ぶれです。しかし、同じ聖書の神の言葉を聞き、同じお一人の救い主イエスさまに救われ、同じ信仰を告白し、同じ恵みに生かされてきたのです。同じお一人のイエスさまの体に、みんな結ばれてきたのです。

信仰の歴史を受け継いで、今ここで礼拝をささげているわたしたちの存在は、その神さまの救いの御業の「証し」です。神さまが生きて働いておられるという「証拠」です。神さまが働いて下さり、救いへと招き、信仰を与えて下さったからこそ、わたしたちは今ここで、神さまを礼拝しているのです。イエスさまを救い主であると告白する群れが、ここに存在していることこそ、イエスさまがまことに救い主であることの「証し」です。

だからわたしたち教会は、イエスさまが主であることを、イエスさまに生かされているという信仰を、これからも人々の前で、神さまに向かって、告白し続けます。そうして一人でも多くの方が、イエスさまが救い主であることを信じる事が出来るように。一人でも多くの方が、この救われた群れに加わることを祈りながら。

主日礼拝では、ルカによる福音書を最初から順番に聞いていますが、今日、まさにこの「信仰を言い表す」という内容が示されたことは、神さまの不思議な恵みのご計画であると思います。今日の御言葉を共に聞いて行きましょう。

<言い表す>

さて、今日のところはイエスさまが御自分の弟子たちに対して語られた御言葉です。イエスさまに従う者たち。つまり、すべての教会、ここにいるわたしたちに対しても、語られていることです。

12:8 でイエスさまはこのように言われました。「言っておくが、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、人の子も神の天使たちの前で、その人を自分の仲間であると言い表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の天使たちの前で知らないと言われる。」

「人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は」とあります。この「言い表す」という言葉は、口語訳聖書では「だれでも人の前でわたしを受け入れる者は」と訳されていました。また、新しい聖書協会共同訳聖書では、「誰でも人々の前で私を認める者は」となっています。言い表す。受け入れる。認める。これが、もとのギリシア語の言葉が持っている意味です。そして、これは教会において「告白」という言葉で語られてきました。

また、「自分をわたしの仲間であると言い表す」とありますが、直訳すれば、「わたしにあると言い表す」となります。つまり、わたしたちがイエスさまの中にある。イエスさまの中に存在している。わたしという存在は、イエスさまにある。そのことを受け入れ、認め、言い表すということです。それが、信仰告白です。そのことを、人々の前で、言い表しなさい。そうイエスさまは教えられたのです。

<言い訳ではなく告白を>

イエスさまがそう教えられたのは、わたしたちが、中々そのことを人々の前で言い表すのが難しいからです。

先週の聖書箇所である 12:1~7 では、イエスさまは、人々を恐れるな、と語られました。イエスさまに敵対する人々が登場し、イエスさまに従う弟子たちもまた、弟子であるがゆえに敵対され、迫害され、あなたはあの人の弟子なのかと問われることが出て来ます。

イエスさまはそれをご存知で、弟子たちに、人々を恐れるな。ただ殺すことしか出来ない人間を恐れるのではなく、命を支配し、死んだ後の復活も、永遠の命も、そして滅びも、すべての権威を持っておられる神さまを恐れなさい、と言われました。しかもこの神さまは、あなたの髪の毛一本まで気にかけておられる方なのだ。あなたを慈しみ、愛し、守ろうと言って下さるお方なのだ。だから、人々を恐れてあなたの信仰を隠したりせず、この神さまに信頼していることを人々の前で示しなさい。そういう内容のことを言われたのです。

現代に生きるわたしたちキリスト者にもまた、人々に対する「恐れ」があると思います。イエスさまを信じているという理由で、迫害や殺されることは、今はないにしても。信仰を持っている人に対する人の目、世間の目を気にする。対立されたくない。傷つけられたくない。信仰を否定されたくない。人と違った目で見られたくない。生活していく中で、そんな、

自己防衛的な思いが働きます。そしてそういう思いから、自分が信じていること、自分が何によって生かされ、どなたによって救われているかということ、語れなくなる、隠してしまうということが、起こってくるのです。しかしイエスさまは、人々の前で、わたしにあることを言い表しなさい、とされます。

また 11 節で、イエスさまはこう言っておられます。「会堂や役人、権力者のところに連れて行かれたときは、何をどう言い訳しようか、何を言おうかなどと心配してはならない。」

これは、イエスさまの弟子であるという理由で、権力者に捕らえられ、危険に晒される場面が想定されています。しかし、そこで、自分で言い訳して何とかしようとしなさんな、と言われるのです。

言い訳とは、自分を正しく見せるために、自分を擁護するために、取り繕うことです。自分の言葉で、自分を守ろうとすることです。しかし、弟子たちが、またわたしたちが、自分の言葉で、自分の信仰のことについて何とかしようとする時、それは、信仰を隠すことや、偽りを語ることにしか出来ないのです。

わたしたちは、自分で自分の信仰を守ることが出来ません。自分の力で、信仰を守ることが出来ないのです。イエスさまははっきりと、あなたがそんなことをしようとしても無駄であると。心配してもどうにも出来ないと言います。

だからイエスさまは、「あなたは人々の前で、自分の言い訳をする言葉ではなくて。信仰を隠したり、偽りの偽善を言うのではなくて、『わたしはイエスにある』と告白する言葉を言いなさい」と言われたのです。イエスさまの名を呼びなさいと言われたのです。イエスさまに頼りなさいと言われたのです。

<わたしもあなたにある>

そうすれば、どうなるとイエスさまは言われたでしょうか。8 節にはこうありました。

「言うておくが、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、人の子も神の天使たちの前で、その人を自分の仲間であると言い表す。」

わたしたちが、「わたしはイエスさまにある者です」と言う時、イエスさまもまた、神の天使たちの前で、神が支配しておられる神の国において、わたしのことをご自分の仲間であると言い表して下さるのです。直訳すれば、イエスさまが、その人にある、と。イエスさまが、わたしの内にある、わたしと共にある、と言い表して下さる。そのようにわたしを、受け入れ、認め、宣言して下さる、と言うのです。

そしてこれは、あなたがこうすれば、わたしもこうしてあげる、という条件ではありません。わたしたちが告白すれば、イエスさまがわたしたちを仲間にして下さるかどうかが考えて下さる、ということではないのです。

これは、確かな約束です。なぜなら、イエスさまは、すでに弟子たちと共におられ、すでに弟子たちを受け入れて下さっているからです。イエスさまはすでに、確かに、もうわたし

たちと共におられるからです。イエスさまはすでに、わたしに救いを備えて下さっているからです。だから、わたしたちがイエスさまを頼るなら、それは必ず受け止められる。救いを求めれば、必ず、与えられる。呼べば、必ず、応えられる。そういう確かな約束なのです。

だから、人々に取り囲まれて、恐れの中に、不安の中に立たされるとき、わたしたちは自分の言い訳や、力や、頼りない言葉で取り繕い、乗り切ろうとするのではなくて、自分を自分で守ろうとするのではなくて。すでに、共にいて下さるイエスさまの名を呼び、イエスさまを頼りなさい、と言われていたのです。

そしてそのとき、人々の前で言うべきことは聖霊が教えて下さる。すべて、神の導きの内に、あなたの信仰を、聖霊が支え守って下さる。そうイエスさまは約束して下さったのです。

しかしこれは、人々の前で、その窮地を自分が思うように切り抜けられる、という意味ではありません。実際、迫害の時代であればそのまま捕えられるでしょう。また、わたしたちも告白することで、やはり相手から傷つけられたり、不当な扱いを受けるかも知れません。

でもわたしたちは、イエスさまに頼るならば。イエスさまの内にわたしの存在が置かれていると知っているならば。そういった人々の扱いを恐れなくてよい、と言われていたのです。なぜなら、父なる神さまが、イエスさまにあるわたしたちのことを、もっと大切に取り扱って下さるからです。

以前、ルカによる福音書 6：22 で、イエスさまはこう語られていました。「人々に憎まれるとき、また、人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。」

人を恐れて信仰を隠してしまうよりも、偽善を語るよりも、聖霊の力によって、わたしはイエスさまと共にある者だと告白する。イエスさまがわたしの主であり、わたしを支配する方だと言い表す。その時、わたしたちはそのイエスさまの名を口にしたがために、人々に憎まれ、追い出され、ののしられ、汚名を着せられるかも知れません。

しかし、イエスさまは言われます。「そのとき、あなたがたは幸いである。その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。」わたしたちがイエスさまを告白するとき、わたしたちはイエスさまの只中に置かれているのです。そして、イエスさまが、わたしもあなたの内にいると言って下さる、その歩みは、人々がわたしたちに与えようとするものより、はるかに素晴らしく、はるかに幸いなものなのです。そうして神さまは、わたしたちに神の国を下さる。聖霊によって、イエスさまと結び合わせて下さり、罪を赦し、神さまの子供として下さり、天の国を、神さまの命を受け継ぐ者として、歩ませて下さるのです。

<赦される、赦されない>

でも、またわたしたちは、12：9～10 の御言葉が気にかかっているかも知れません。「しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の天使たちの前で知らないと言われる。人の子の悪口を言う者は皆赦される。しかし、聖霊を冒瀆する者は赦されない。」

まず最初の「知らない」という言葉は、退ける、拒む、拒否する、という意味です。人々の前でわたしを知らないと言うなら、つまり、弟子たち、わたしたちが、人々を恐れて、イエスさまを否定し、わたしはイエスさまと共にいるのではない、と人々に言うなら。イエスさまもまた、神の天使たちの前でわたしたちを拒む、と言われたのです。

しかし、続けてこう言われました。「人の子の悪口を言う者は皆赦される。」

これは、先程のことと矛盾しているように聞こえます。わたしたちが人々の前でイエスさまを知らないと言う時、イエスさまも神の天使たちの前でわたしたちを知らないと言う。でも、人の子、つまりイエスさまの悪口を言う者は、皆赦される、というのです。

イエスさまは、わたしたちが人々の前で、イエスさまの仲間であること、イエスさまにあることを、受け入れ、認め、言い表すことを、確かに心から望んでおられます。そうすべきであると教えておられます。知らないと言うな。そう言っておられます。

しかしその一方で、実際の歩みにおいて、わたしたちが自分の弱さのために、頑なな心のために、恵みを悟ることが出来ないために、人々の前でイエスさまの悪口を言ってしまう。否定の言葉を言ってしまう。そういう歩みをしてしまう者であることをよくご存じなのです。

それはまさに、神の言葉を聞きながら、イエスさまに敵対したファリサイ派の人々です。イエスさまに従いながら、イエスさまが逮捕された時に自分は関係ないと何度も言い張った弟子たちです。人の前で信仰を隠し、取り繕って言い訳を口にしてしまう、わたしたちです。

あなたたちは、わたしにあると言い表しなさい。わたしもまた、あなたにあるから。そう約束して下さったイエスさま。

しかしイエスさまは、わたしたちが聖霊に導かれながらも、自分の罪のために、弱さのために、頑なさのために、悪口を言ってしまう者であること。何度も何度も失敗し、七転八倒するような信仰の歩みしか出来ないことを、よくご存知なのです。わたしたちが人の目を恐れ、信じたことを疑い、自分の力に依り頼むような、愚かな歩みしか出来ないことを、よくご存知なのです。

しかし、皆、赦される。なぜなら、このわたしたちの愚かな罪を、弱さを、イエスさまがすべて丸ごと背負って下さったからです。わたしたちの友となり、十字架で命を捨てて下さったからです。わたしたちは何度も失敗し、何度も疑い、何度も逃げ去りながら、それでも父なる神さまの愛の中で、聖霊の導きの中で、イエスさまの救いの恵みの中で、何度でも立ち上がらされ、「イエスさまがわたしの主である」「イエスさまが救い主である」「わたしはイエスさまにある」。この信仰に生かされ、告白する者とされていくのです。

だから、イエスさまはこの点ははっきりと告げられます。「聖霊を冒瀆する者は赦されない」。聖霊とは、神さまを示して下さるお方であり、罪人のわたしたちをイエスさまの救いに与らせ、イエスさまとわたしたちを結び合わせて下さるお方です。わたしたちを父なる神

さまの子どもとして下さるお方です。神さまの愛を、わたしたちに教え、悟らせ、受け取らせて下さるのが、聖霊なる神さまです。

聖霊を冒瀆する。これは、あなどる、誹謗中傷する、汚す、という言葉ですが、それはつまり、神さまの愛を蔑ろにする。神さまの愛を否定する。救いを受け取ること自体を拒む、ということです。

目の前にあるイエスさまの救いを、十字架でわたしのためにささげられた命を、差し出された神さまの救いの御手を、払いのけ、拒絶するということです。

差し出されている罪の赦しを受け取らないのですから、罪が赦されないのは当然です。それを自ら拒否したのですから。

だからイエスさまは、聖霊を冒瀆するな、救いを拒絶するな、と言っておられるのです。

聖霊によって、救いを受け入れ、神の子として歩みなさい。その中で、人々の前で信仰を隠してしまったり、言い訳をしたり、迷ったり、心配になることもあるかも知れない。でも、そのときも、いつもわたしがあなたと共にあるのだから、わたしはあなたにあるのだから、わたしの名を呼びなさい。そう言って下さるのです。

わたしたちの歩みは、本当に弱々しく、頼りないものです。恐ればかり、不安ばかり、心配ばかりしています。この 96 年間、いや、イエスさまが天に上げられて、教会が歩んできたこの 2000 年間、イエスさまに従う人々は、ずっとそんな歩みをしてきたのではないのでしょうか。

でも、イエスさまの名を呼んだ者たちは皆、赦されてきたのです。救いを求めた者たちは皆、それを与えられてきたのです。父なる神さまに聖霊を与えられ、救いに与り、人々の前で信仰を言い表してきたのです。「イエスさまは、わたしの仲間です。イエスさまは、わたしの主です。わたしはイエスさまにある者です。」

イエスさまは、そんな教会に語り続けて下さいました。「わたしは、あなたの仲間である。わたしは、あなたと共にある。わたしは、あなたにある。」

わたしたちの教会はこれからも、このイエスさまと共に、イエスさまの確かなこの約束の内に、何十年も、何百年も、何千年も、イエスさまが再び来られる日まで歩いていくのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

今日は宮崎中部教会の創立 96 周年の記念礼拝を守ることができ、心から感謝いたします。

イエスさまの救いの御業が成し遂げられ、聖霊が遣わされ、あなたに召し集められた教会が誕生しました。そして、いつもあなたが生きて働いて下さり、救いの御業を行なって下さり、この宮崎の地にも福音が宣べ伝えられ、今日この日も、イエスさまこそ救い主であると、イエスさまにあって生かされていると、告白する群れが、ここにいます。神さまの御業をほめたたえます。

しかしその恵みの中にありながら、さまざまな心配を抱き、人の目を恐れ、自分の力に頼ろうとする、愚かなわたしたちの歩みをお赦し下さい。どうかこれからも、聖霊なる神さまの豊かな導きのもと、イエスさまがわたしたちと共にあって下さり、罪の赦しを与え、新しい命を与え、神の子として大いなる幸いの中を歩いていくことが出来るようにして下さい。

聖霊によって、わたしたちがこれからも声高らかにイエスさまを告白し、あなたを賛美し、多くの人々をあなたの救いの御許へ招くことが出来ますように。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン